

「ぽぷかる」参観記

信時哲郎

(甲南女子大学文学部)

1 はじめに

女子学研究会も設立から6年ほど時間が経った。当初は甲南女子大学女子学研究会を名乗り、メンバーも学内の教員に限られ、開催場所も学内限定であった。もちろん、これは外部を排除していたなどというわけではなく、学内の教員間での研究・交流サークルのようなものから出発したからだというに過ぎない。

それから学外の参加者も徐々に増え、機関誌「女子学研究」も出し、HPを作るうちに、「甲南女子大学」の看板をはずして今日に至っているが、開催場所に関しては、一度だけ京都の花園大学で研究会を開催させてもらったのみであった。女子学研究の輪は、もっと広げていかなければならないというのに、このひきこもりぶりは反省すべき点であろう。

そんな矢先、長久手で毎年開催される総合ポップカルチャーイベントである「ぽぷかる」のメインキャラクター文化の妖精ぽぷかるちゃんを務める神楽くるるさんの伝手で、2016年の1月10日に公開研究会を開催することとなった。本稿は、そのイベントの参観記である。

会場の下見

現地入りしたのは研究会開催前日の1月9日。名古屋駅にて同僚の池田太臣先生、馬場伸彦先生、案内をしてもらう名古屋文理大学の田川隆博先生と落ちあって山本屋本店（山本屋総本家とは別）で味噌煮込みうどんを食べる。腹ごしらえをしたところで、田川先生の自家用車にてモリコロパーク（愛・地球博記念公園）へ…

モリコロパークは名古屋市中心部からは20キロほど離れた長久手市にあり、近年は大学等が進出していることもあって、市民の半数以上が30歳未満であり、東洋経済「住みよさランキング2015」では、全国2位にランクインしているという。が、会場についてみると、切り開かれた広大な土地に寒々と地球市民交流センターが建っているだけで、事前に抱いていた若者の街、住みよさ全国No.2といったイメージから思い浮かぶものとはずいぶんと異なっていた。東京で開催されているコミックマーケット（コミケ）や秋葉原の喧騒を知る人間にとっては、広々としすぎている気がするのだが、単に慣れの問題なのかもしれない。

ここで開催される「ぽぷかる」とは、平成22年度から始まった「愛知県を、誰もがポップカルチャーを自由に語り、表現し、触れ合える場所にすること（＝聖地化）」を目指したイベントで、公式HPによれば「愛知ぽぷかる聖地化計画の第5弾となる「ぽぷかる5」では、市民が広くポップカルチャーに触れ、楽しむ機会として、ポップカルチャー系アーティストが集結するステージはもちろん、作品展示即売会、ぽぷかるのイベント限定コラボカフェ、コスプレ広場を展開します」なのだそうである。

早速、研究会の会場である多目的室に行ってみると、コスプレイヤーたちの控室になっていたようだが、研究会を開催するにもまずまずの環境であるようだった。

会場の下見をした後、作品展示即売会に行ってみた。愛知県主催ということもあってか、東京のコミケ会場を埋め尽くす二次創作同人誌などは目にすることがなく、また、女性向けにしる男性向けにしる、エロチックな要素は見られなかった。主催者を考えれば当然なのだろうが、良くも悪くも現在のポップカルチャーを推進してきた二次創作とエロを抜きにした「清く正しいポップカルチャー」というのは、スパイスのないカレーのようなものである。もちろんスパイスがないカレーであっても、肉のうまさ、野菜のよさで勝負する道はある。つまりコミケ的なスパイスがないのならば、そのかわりになるようなスパイスを見つける道も

あると思う。

主催者もその辺の事情を意識しているのか、Japan Popculture Awardなるものを今回から始めたという。が、ネットで調べてみると、愛知ぼぷかる制作委員会☆第5期の公式Twitterアカウントが「残念な作品も正直ありました。そのテーマならきちんと作品仕上げようよ、みたいな。」（2015年12月20日）と書き込んだことから炎上騒ぎがあったとのこと… たしかに「本気で作った」「何気なく作ってみた」「たまたま作った」そんな作品すべてを対象とした日本初のアワードです」として作品募集をしながら、公式アカウントでこれはないだろうと思う。が、新しいイベントというのは、えてしてこういうことも起こるもの。回数を重ね、やがて「ぼぷかる」らしい「ぼぷかる」になってくれればと思う。

そんな中で精彩を放っていたのは、自衛隊愛知地方協力本部瀬戸地域事務所であった。自衛隊車両の展示、制服を貸与しての写真撮影、自衛官体験のイベントなどを行っていた。近年、大日本帝国海軍の軍艦を女性に擬人化したゲーム「艦隊これくしょん」、大和撫子の嗜みとして戦車道が重視された世界を描くアニメ「ガールズ&パンツァー」がブレイクしたが、それを待つまでもなく、漫画やアニメの王道といえば“バトル”である。漫画やアニメを好きな人間は戦争礼讃者であるとか、好戦的であるなどと言うつもりなどないが、そうした作品を好む人々のイベントに自衛隊が接近して、入隊を呼びかけようというのはきわめてまっとうな戦略であると思う。しかも、ぼぷかるの場にふさわしいポスターも作っており、まったく見事であったと思う。多目的室では、迷彩服を着た現役自衛官と思われる人物が、来場した青年たち数人に詳しい説明をしている姿もあったが、まるでオープンキャンパス！ 我々大学教員も、学ぶべきところが多い…



また、自衛隊ではないが、飛行機オタクに向けてセントレア空港（中部国際空港）で働こうと呼びかけるポスターもインパクトがあった。名古屋というのは「心の中で思っただけでも、普通ならば口に出さないこと」を公言してしまうような現実的な街だとかねがね思っていたのだが(?!)、その好例になるかと思う。

2 地下アイドルを見る

モリコロパークを後にして、再び名古屋市内に向かい、大須の街を歩く。おもしろいところだとは聞いていたが、実際に来るのは初めて。もともとは大須観音への参拝者をあてこんで商店街が形成されたのであろうが、昭和から同じたたずまいで商いを続けていると思われる店のすぐ隣に若者向けの店、エスニック料理店、カフェ、そしてコメ兵などが延々と並び、しかも、どこも賑わっているように見えた。商店街のアイドルグループOS☆Uも人気だそうで、あちこちにポスターが貼られていた。

同じ門前町であっても、東京の巢鴨のとげぬき地蔵や浅草など、今も賑わってないわけではないのだが、大須のように老若男女が入り混じっているわけではない。東京の場合だと、街ごとに棲み分けが行われすぎてしまって、ごちゃ混ぜのおもしろさ、いつ、誰が行ってもおもしろいというような空間が少ないように思う。

散策の後、田川先生の指導に従って出向いたのが、地下アイドルのライブハウスであるLIVE HALL M. I. D. かつて自分のゼミ生にも地下アイドルがおり、彼女がその実態について卒論を書いていたこともあって、おおよそのことは知っているつもりであった。つまり、地下アイドルとは、アイドルになりたい女子（しかもアルバイト代も稼げる）と、アイドルっぽい女性と話をしたいという男性の利害が一致した飲食店、風俗営業ギリギリの場所… というイメージである。しかし、実際に訪ねてみると、思っていた以上に健全な空間であった。

地下にあるライブ会場に入ると、その薄暗いスペースでは十数人の男性オタクたちがアイドルの曲にあわせてコールやMIXなどのいわゆるオタ芸を披露していた。しかし、よく見ていると、グループが入れ替わるとスムーズに次のグループのファンと入れ替わっており、その譲り合いの精神、“プロ意識”とも言える行動は誠に見事であったと思う。さらによく見てみると、どのグループの歌にも声をかけ続け、踊り続けている人がいた。おそらく彼は、名古屋圏で活動しているアイドル達のオリジナル曲を、歌詞も振付も含めてしっかり記憶しており、どこでどういう声をかければいいのか、自分がどういう動きをすればいいのかきちんと理解しているようで、すごいものだなと思わされた。

そう、地下アイドルのライブは、アイドルだけでは成り立たないのだ！ こうした真のオタクの助けがあって、初めて成立しているというべきだろう。風俗業ギリギリなどと思っていたが、これはむしろ全身全霊でクラブ活動に打ち込む少女たちと、それを全身全霊で応えようとするオタクたちがスパークする場だと言った方が近いかもしれない（体育会系少女集団とチア男子の関係!?)。

そういえば、江戸川乱歩は浅草の安来節小屋の魅力を「ネジレ趣味」だと言って絶賛していた。「ネジレ」というのはどこかの方言で、いやみと訳せばやや当る。いやみたっぷりなものを見ると、こう身体がネジレて来る。そのネジレを名詞に使ったのだ。我々は一応ネジレなるものを厭に思う。だがそのネジレさ加減があるレベルを越すと、今度はそれが言うに言われぬ魅力になる」。そして、こんな風に書いている。

和製ジャズと言われている通り、小屋全体が一つの楽器であるが如き、圧倒的な、野蛮極まる、およそデリケートの正反対であるところの、あの不協和音楽の魅力である。これは浅草公園のある小屋に限られている現象で、まして他地方の安来節にはほとんど見られないところだが、舞台の唱歌がだんだん高潮に達して来ると、小屋全体に一種の共鳴現象が起こるのだ。最初は半畳とか弥次とかいうものだったにちがいない。それが徐々に形をなして、音楽的になって、いつの間にか今日の舞台と見物席の交響楽が出来上がったのであろう。それを第三者として傍観していると、数時間にして、さしもの音楽好きも、すっかり堪能させられるのである。

「浅草趣味」（「新青年」大正15年9月）

大正時代の浅草の安来節小屋と平成時代の地下アイドルはほとんど同じではないだろうか。いや、そもそも歌舞音曲をライブで見る／見せることの楽しみは、太古から変わっていなかった、ということなのかもしれない。

ところで、アイドルたちのパフォーマンス自体は、たぶんアートとしては2流か3流レベルなのだろうと思う。が、熱心さは本物だろうし、おそらく日本のアイドルの頂点にいるのだろうAKB48あたりと比べても、知名度では決定的に負けるにしても、歌も踊りも顔面偏差値もいい勝負なのだと思う。となれば、チケットを取ることも難しいというAKBやSKEのライブに出かけ、遥か遠くから声をかける道を選ぶのと、知名度ではまだまだであるにしても、ライブを共に作り上げ、ライブ後の物販やチェキによる2ショット写真の撮影で経済的に援助しながら、話をしたり、握手をしたり、サインをもらったりできる道を選ぶの、どちらがカシコイだろうか？ もしもアイドルと恋愛関係になれる確率などを考えてみれば、地元で地下アイドルを応援した方が絶対に“お買い得”だと思うのだが、こんな仮定は下世話すぎるだろうか…

ライブに行き、もう一つ感じたのはオタクたちのやさしさだ。もちろん、いやらしい妄想をしながらアイドルに声援を送る輩もいるだろうし、スカートの中の写真を撮ろうとしたり、家までつきまったり、プライベートを覗き見ようとする者もたくさんいるのかもしれない。しかし、それにしても一介の旅行者である我々に対しても、「余所者は来るな」といったオーラを発するわけでもなく、また、「オレの〇〇ちゃんに近づくな」とばかりにあたりを牽制する者もいなかった。物販会場にいたオタクたちは、初心者にもアイドルライブの楽しみ方を惜しみなく伝授してくれ、それは「排除」どころか、新しい仲間が増えるかもしれないことへの期待に満ち溢れているように感じられた。1回の訪問で何が分かるのか、と言われればそれま

でだが、ビジュアル系バンドを追いかけるバンギャの文化と比較してみるのもいいのではないかと思った。

3 研究会

翌日は13時からの研究会に向けて地下鉄でモリコロパークに向かった。女子学研究会の名古屋組である貝沼さん、富田さん、田川先生もゼミの卒業生と現役生を連れて登場。京都からは西原さん、米澤先生。神戸からバスでやってきた信時ゼミ生Kとも合流。

レイヤーさんたちの控室であった多目的室が13時からいきなり研究会の場所になるので、来場者も違和感があっただろうが、ポスターやHPにまで掲示したからにはやらないわけにはいかない。ツイッターでも告知してくれていたようだ。



スタッフからプロジェクターやスクリーンを借りてきたり、マイクの電池を買ってきたりとバタバタしていたが、13時になるとスタンバイも完了。無事に馬場先生による「制服偏愛考 ~ 私たちが制服に惹かれる理由。」が始まった。

ウチワの参加者しかいないだろうと思っていたのだが、会場にはフリで参加する人の数もちらほら。大入り満員という状態ではなかったものの、女子学研究会の初の対外試合としては悪いものではなかったと思う。

馬場さんの発表はイラストレーターの森伸之さん、写真家の青山裕企さんなど男性たちの眼からする制服へのこだわりとフェティシズムだけでなく、女性たち自身の制服の神話化・絶対化について広く深く論じ、発表後の質疑では、女子学研究会会員からの質問やコメントだけでなく、いわゆるアカデミズムとは違った場所で暮らしておられる方からもさまざまな質問やコメントがあり、極めて有意義なものであったと思う。



欲を言えば、現役の女子高校生、また、女子高校生のコスプレにいそしむレイヤー、学校の指定とは関係

なく学校風の制服を作って着用する女子・男子… 多くの意見を聞いてみたかったとも思うが、それはまた次の機会にゆずりたい。

ともあれ、「ぼぷかる」という場所での研究会は、もしかしたら自衛隊よりも場違いな存在であったかもしれないが、得るものは大きかったように思う。ちょうど2015年末に、キングオブコメディの高橋健一が20年かけておよそ600着の制服を盗み続けて逮捕された事件が明るみになった直後で、話題がタイムリーすぎるのではないかと配していたが、全くの杞憂であった。

名古屋駅近くで行った打ち上げも大盛況。昨日の懇親会にひきつづき、この日の名古屋名物満載の居酒屋も、安くておいしかった。大須もあるし、食べ物もいいし、名古屋に住んでみるのもいいかな、と思わされる2日間であった。田川先生、神楽さん、ありがとうございました。

4 共通教育科目「女子学」

甲南女子大学では、来年度より1年生むけの基礎教養科目（共通科目）として「女子学」が開講されることとなった。女子大でありながら、女性をキーワードとした共通科目が少なすぎることから、カリキュラムが大々的に改変された中に、本学を発祥の地とする女子学が紛れ込んだわけである。いわゆる女性学系の授業とは出発点からして異なっているのだが、学生の反応はどうなるだろうか。女子学研究会のメンバー5人による輪講によるものだが、シラバスは下記のとおり。

授業のねらい

本講義は、近年急速に広がってきた「女子」という言葉に注目し、その言葉の背後にある、女性の新しいライフスタイルを明らかにしようとする、学問横断的なオムニバスの講義である。

具体的には、マンガ・アニメやファッション、写真などの女性の趣味的な領域を対象とし、そこでの女性の（男性と比較した場合の）新しい行動や思考の様式を明らかにする。

本講義で「新しい女性のライフスタイル」を学ぶことによって、従来の女性像を相対化し、学生たちがより自由に自分のライフスタイルを考えることができるようになることを目指す。

随時、学外からゲストスピーカー（3～5名）を迎えて、講演を行う予定である。そのため、授業内容には変更の可能性がある。

授業計画／Class schedule

1. 女子学とは何か？～全体のガイダンス（全員）
2. 鉄子は増えたのか？（信時哲郎）
3. ミス・コンテストの歴史と現在（信時哲郎）
4. 表現するカメラ女子（馬場伸彦）
5. 写真の中の女子表象（馬場伸彦）
6. 写真史における女子写真家（馬場伸彦）
7. オタク女子1～オタク史の中の“女子”（池田太臣）
8. オタク女子2～メイドカフェという場を考える（池田太臣）
9. 女子とファン活動（池田太臣）
10. 女子とマンガ・アニメ文化1（増田のぞみ）
11. 女子とマンガ・アニメ文化2（増田のぞみ）
12. 女子とマンガ・アニメ文化3（増田のぞみ）
13. 「女子」の誕生（米澤泉）
14. 「大人女子」という生き方（米澤泉）
15. 女子のチカラ（米澤泉）

女子大1年生に向かった講義は、或る意味でこれも一種の対外試合と言えるかもしれない。女子学研究会として、二度目の対外試合となるが、鋭意努力したい。